入 選

培われた技術と水

茨城大学教育学部附属中学校

一年 山 崎 千 鶴

私の家の近くには、「逆川緑地公園」という水と緑の豊かな場所がある。小さな頃は逆川沿いの土手や芝生が遊び場だった。今では犬を連れていくのが日常だ。鳥たち、草花、川の様子が四季折々違って見える。冬の朝、川面からホワホワと湯気のように霧が立ちのぼってくる幻想的な風景が特に好きだ。それを「気嵐」と呼ぶのを知ったのは最近のことだ。私の犬がこの公園を走り回ると、足元からお腹までびしょびしょになる。木道の左右に生える植物はシダやコケが多く、いつも空気がしめっているように思う。その散歩の途中には「笠原水源」がある。龍頭を形どった蛇口に水を汲みに来ている人をよく見かける。飲用水として利用できるそうで、ここはか

つて水戸になくってはならなかった水道の源泉なのだ。水戸の二代藩主である徳川光圀は、初代藩主の頼房から引き継いだ下町の給水難を解決するために、水道の敷設を試みた。（「笠原水道の歴史」より引用）この時、水源地に選ばれたのがこの逆川沿いの湿地帯からの湧水だった。この辺りは逆川が侵食谷を形作り、その台地斜面から良質の水が水量も豊かに流れ出しているそうだ。また、この水源は初代頼房の代から笠原不動尊一帯の山林として特別に保護され、木々の枝葉を折ることさえ禁じられていたという。私が日頃感じてきたこの公園一帯のしめっぼさや水の豊かさは、まさに「水戸を潤す源」だったのだ。

江戸時代、千波湖を埋め立ててできた水戸の下町は、飲用水としての水質の悪さに苦しんできたが、それを笠原水源からの地下水路（暗きよ）により、下町一帯にきれいな水を導き、水量を確保できた。汚水が流れこみにくい暗きよを作るといって技術の高さは当時の水道の中でも群を抜いていたそうだ。領内の崖から切り出した凝灰石を使って、地下水路の

岩樋を作ったという。美しい水源を見つけ、谷や川を越えて十一キロメートル近い暗きよ水路を作るのにわずか一年半ほどしかかかっていないことに驚く。たくさん的人员を工事にあたらせ、領内の石材を使うことで経費を抑えながら効率よく事業を進められたのだと思う。そこには、水戸の下町の発展を願う藩の思いを感じる。笠原水道は補修、改修をしながらなんと二百七十年ほど使われた。安心安全な水を利用することを目指し、水源を大切にすると、現代に通ずる初代頼房の判断と、光圀の行動力やその周囲の技術者たちの功績に感銘を受けた。

同時に、私は以前読んだ「中村哲」医師の本を思い出した。医師でありながら日本から遠いアフガニスタンの地で用水路を築いた人物である。（「中村哲物語」より引用）中村医師の敷設した用水路壁面には「蛇かご」という工法が用いられている。

これは日本で江戸時代から護岸工事や用水路建設に用いられてきた工法で、伝統的なものである。鉄線でかごを編み、中に石をつめこんで用水路の両側に並べていく。石がふんだんにあるアフガニスタ

ンの地では、家作りや畑の仕切りにも石を使い、石を利用して何かを作るのはお手の物だという。中村哲医師は資金や機材にお金をかけず、地元の人々が安易に補修、改修できる技術を伝えたのだ。

現在、水道の蛇口をひねれば水が飲める日本の水道技術は非常に高いと思う。光圀や中村哲医師の功績の一部を知り、日本の水に対する技術の高さが培われた歴史を誇りに思うと同時に、世界各国であたりまえに水を確保できない地域が少なくないことを忘れてはならないと思った。最新技術にこだわらず、日本の伝統的で安価な水道技術を利用することで救われる地域はまだまだあるのではないかと思う。